

総合的な学習の時間の指導法の一研究

—高校2年生に向けたキャリア教育の授業実践の考察を通して—

A Study on a Teaching Method of the Period for Integrated Studies
: Case Study of The Contents and Methods of Career Education among Second-year
High School Students

元 根 朋 美
Tomomi Motone

Abstract

Through teaching practice of career education towards second-year high school students, we examined the teaching method to solve closed course selection in the future. The lesson consists of three things: (1) noticing, (2) broadening the viewpoint, (3) spontaneous behaviors. As a result, this teaching method was effective in fostering motivation for students to learn autonomously.

Keywords: the Period for Integrated Studies, Career Education, Teaching method

1. はじめに

高校生の進路相談を受けていると、1年次の文理選択の際も、3年次の進路選択（多くの場合大学や学部選択）の際にも、「数学は苦手だから文系にする」「本来は理系でないと受験できない学科だけど、（A大学以外の大学受験は難しくなることは承知しているが）A大学なら文系でも受験できるから文系にする」「自分の成績ではこっちしか無理だから」などと、その時点で自分自身が感じている苦手意識や成績といった「ある中」から進路を決めようとする返答に多く遭遇する。その際、今なら努力をすれば可能性は広がると具体的な例を提示しても、「えー無理」「できない」「しんどい」「これでいいし」といった一歩外に踏み出そうとしない返答や、「うーん」と悩んではみるものの「でも無理だと思う」と足踏みをしたまま次の一歩が外に出ない返答も多い。こうした、内へ内へと狭まっていく選択や外へ出ない選択は将来が閉じた進路選択に繋がっていき、将来を考えることが狭く暗くワクワクせず楽しくない行為だと捉えられがちになる。一般社団法人全国高等学校PTA連合会・株式会社リクルートマーケティングパートナーズ 合同調査第7回「高校生と保護者の進路に関する意識調査」2015年（2016年2月）によると、「高校生に進路を考えると、どんな気持ちになるか質問したところ、『楽しい気持ち』は8%。『どちらかという楽しい気持ち』の15%を合わせて22%が『楽しい』と回答した（楽しい・計）。同2009年の調査においても、「自分の可能性が広がるようで楽しい」と回答した生徒は約26%であった。視点を180度変えると、それぞれ78%、74%の生徒が進路を考えると「楽しい」と感じていないことがみえてくる。したがって、これらの調査結果からも、一定の高校生にとって将来や進路を考えることは狭く暗くワクワクせず楽しくない行為だと捉えられているといえよう。¹

また、このような高校生達の行動には、自分の未来をより良くしようとする向上心が見受けられない。この向上心の乏しさは、藤田が「学力の重要な要素である学習意欲の乏しさが指摘される今日」と分析する学習意欲の乏しさとも深く関わるのではないだろうか。もちろん、文理選択時も進路選択時も、内に狭める選択や持てる範囲の中で選択してやり過ごすことは可能である。しかしながら、高校や大学を卒業し社会に出た後も、内に狭める選択や持てる範囲の中で選択してやり過ごし続けることは難しい。社会を良くするために、業績をあげるために、今よりも生活を良くするためになどの場面に遭遇した時、一步外に踏み出して新しい知識や技術、考え方などを身につけなければ前に進むことは困難となる。では社会人になったら突然できるようになるかということ、それは難しいだろう。学校に在籍している時から様々な場面で一步外に踏み出して新しい知識や技術、考え方などを身につける経験を重ねることで、多様な身につけ方を知り、社会人になった時にも役に立つ力として生きてこよう。

そこで本研究ではさまざまな物事に気づく力、前向きに取り組む心、自ら探求するために考え、調べ方を知り、主体的に行動に発展させていくことを目的とする高等学校での総合的学習の時間におけるキャリア教育の授業の、「ある中」からではなく外に一步踏み出し、向上心を持ち、自ら学ぶ働きかけをする指導法について考察する。

2. キャリア教育で求められる教育内容

キャリア教育は、中央教育審議会答申（以下、中教審答申）「初等中等教育と高等教育との接続改善について」(1999年12月)で用語「キャリア教育」が文部省に正式に採用されたのが始まりである。この答申におけるキャリア教育の定義は「望ましい職業観・勤労観及び職業に関する知識や技能を身に付けさせるとともに、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てる教育」であった。元根（2011）は、キャリア教育の定義、およびその取り組みの変遷を2011年の時点で3つ（導入期、第一次転換期、第二次転換期）に分類している。導入期におけるキャリア教育は、中教審答申「初等中等教育と高等教育との接続改善について」（1999年12月）が該当し、「対象を小学校段階からとし、当時の目的は、今後の将来を考えるための進路選択のための進路指導の傾向が強いと」分析している。続いて、第一次転換期は2003年「若者自立・挑戦プラン」が該当し、「最初の進路指導に職場体験やインターンシップにみられる実際の体験が加わった傾向」があると分析している。第二次転換期は「2006年の教育基本法の改正をはじめとするキャリア教育の定義の変化である」と位置付け、第二次転換期のキャリア教育は「進路指導に実際の体験が加わった第一次転換期の型に、体験だけではなく『基礎的・汎用的能力』にみられる能力の育成が加わっている」と分析している。第二期転換期である60年ぶりに改訂された教育基本法では、義務教育の目的の一部に「各個人の有する能力を伸ばしつつ社会において自立的に生きる基礎を培う」ことが位置づけられ、（教育の目標）第2条二では、「個人の価値を尊重して、その能力を伸ばし、創造性を培い、自主及び自律の精神を養うとともに、職業及び生活との関連を重視し、勤労を重んずる態度を養うこと」²と法律上でも職業教育や職業や勤労を重んじる態度の育成が明示された。そして、翌年改訂された学校教育法、2008年中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」、「教育振興基本計画」³、「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」と、学校教育におけるキャリア教育の充実が求められ続けている。

しかし、本多（2010）が「キャリア教育の重要性が唱えられるようになって久しいが、高等学校普通科におけるキャリア教育は充実しているとは言えない状況にある」と指摘し、三河（2009）も「高等学校では、進学・就職指導のみを目的とした指導に終始しているのが現状である。そのため（略）活動が単発的になってしまい、キャリア教育本来のねらいに沿った活動になっていないのが実情であ

る」と指摘している。巻野（2006）も、「昨年度、実施したキャリア教育に関する教職員対象の意識調査から『キャリア教育の必要性は感じるが、どう取り組めばよいかかわからない』（略）などの声が上がっていた」と報告していることから、まだまだ改善の余地があるといえよう。

また、中央教育審議会は2007年に開催したキャリア教育・職業教育特別部会（第7回）で「社会的・職業的自立に必要な基礎的・汎用的能力については、『4領域・8能力』や『学士力』をベースとしつつ、新学習指導要領との整合性を十分に図るとともに、その他の提案等も参考にしながら、必要な追加・修正を行う形で整理してはどうか」と「基礎的・汎用的能力」の明確化を議論し、秋田県総合教育センターキャリア教育プロジェクトも（2011）「今後『4領域8能力』から『基礎的・汎用的能力』への転換を徐々に図っていく必要がある」と指摘している。このように以前からキャリア教育の定義の揺らぎの指摘および明確化が求められ続けていたことから、中央教育審議会は「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」（2011）においてキャリア教育と職業教育およびその関係を定義づけ、さらに「基礎的・汎用的能力」を次のように定義づけている。

基礎的・汎用的能力は、分野や職種にかかわらず、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力であると考えられる。例えば企業が新規学卒者に期待する力は、就職の段階で「即戦力」といえる状態にまで学校教育を通じて育成することを求めているわけではなく、一般的には「コミュニケーション能力」「熱意・意欲」「行動力・実行力」等の基礎的な能力等を挙げる人が多い。社会人・職業人に必要とされる基礎的な能力と現在学校教育で育成している能力との接点を確認し、これらの能力養成をキャリア教育の視点に取り込んでいくことは、学校と社会・職業との接続を考える上で意義がある。(略)基礎的・汎用的能力の具体的内容については、「仕事に就くこと」に焦点を当て、実際の行動として表れるという観点から、「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」の4つの能力に整理した。

人間関係形成・社会形成能力	多様な他者の考えや立場を理解し、相手の意見を聴いて自分の考えを正確に伝えることができるとともに、自分の置かれている状況を受け止め、役割を果たしつつ他者と協力・協働して社会に参画し、今後の社会を積極的に形成することができる力
自己理解・自己管理能力	自分が「できること」「意義を感じること」「したいこと」について、社会との相互関係を保ちつつ、今後の自分自身の可能性を含めた肯定的な理解に基づき主体的に行動すると同時に、自らの思考や感情を律し、かつ、今後の成長のために進んで学ぼうとする力
課題対応能力	仕事をする上での様々な課題を発見・分析し、適切な計画を立ててその課題を処理し、解決することができる力
キャリアプランニング能力	「働くこと」の意義を理解し、自らが果たすべき様々な立場や役割との関連を踏まえて「働くこと」を位置づけ、多様な生き方に関する様々な情報を適切に取捨選択・活用しながら、自ら主体的に判断してキャリアを形成していく力

このような中央教育審議会答申に加え、藤上（2014）は「いつの世においても変わらない働くものとしての根底にある観や術をとらえていくことこそが、どのように社会が変化したとしても大切なことであり、『今』を生きる子どもたちの支えとなっていくのではないか」「それこそが、子どもたちが、『未来』に向けて生き抜くための土台となるのではないか」と提起し、松本（2012）も「日本人の学力における以上の特徴を踏まえると、これから追及すべき<学力>とは、生活に応用できる、大人になっても定着する学力である」と述べている。

これらの先行研究から、本研究が考察するさまざまな物事に気づく力、前向きに取り組む心、自ら探求するために考え、調べ方を知り、主体的に行動に発展させていくことを目的としている高等学校での総合的な学習の時間におけるキャリア教育の授業の、「ある中」からではなく外に一步踏み出し、向上心を持ち、自ら学ぶ働きかけをする指導法には一定の必要性があると考えられる。

3. 高等学校におけるキャリア教育

「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」は、高等学校におけるキャリア教育について「後期中等教育においては、生涯にわたる多様なキャリア形成に共通して必要な能力や態度の育成と、これらの育成を通じた勤労観・職業観等の価値観の自らの形成・確立を目標として設立することが重要である」とし、そのために重点を置く教育活動として「社会・職業の現実的理解を深める」ことを掲げている。また、高等学校（特に普通科）におけるキャリア教育の推進方策では、「自らのキャリア形成を自ら考えさせ、選択させることが重要である」と教育内容を提示し、さらに、キャリア教育を行う時間の位置づけは「総合的な学習の時間や特別活動等の中で行われているのが現状である。（略）総合的な学習の時間等を効果的に活用していくことが望まれる」と総合的な学習の時間の効果的な活用についても求めている。

学習指導要領における総合的な学習の時間の目標は「第1目標 横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の在り方生き方を考えることができるようにする」であり、「自ら課題を見つけ」ることは、さまざまな物事に気づくことが必要であり、「自ら学ぶ」ことは探求することで初めて可能となる。

よって、本研究が目指すさまざまな物事に気づく力、前向きに取り組む心、自ら探求するために考え、調べ方を知り、主体的に行動に発展させていくことを目的としている高等学校での総合的な学習の時間におけるキャリア教育の、「ある中」からではなく外に一步踏み出し、向上心を持ち、自ら学ぶ働きかけをする指導法の考察は、「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」や学習指導要領における総合的な学習の時間が求める目標を達成させることができるのではないかと考える。また、本研究は、「学校と社会・職業との接続を考える」ためにも、社会とのつながりを意識し易い題材を用いた授業を研究の対象とした。

4. 一步踏み出し、向上心を持ち、自ら学ぶ働きかけをする指導法

本研究が対象とした授業は、総合的な学習の時間と特別活動の両方の要素を持たせた生徒の人間力とキャリアデザインを意識を高めるプログラムの導入授業である。授業は2013年5月に私立A高校2年生（324名）を対象に行った。

授業の流れは、事前に授業の事前学習として職業調べの課題を課し、その結果を用いて①気づく、②視点を広げ調べる、③主体的の大切さの三つを柱に構成した。

授業形式は講義スタイルであったが、全生徒が参加できるよう、授業者（教員）はワイヤレスマイクを持ちながら教室中を歩き、多くの生徒に質問の答えを求める場面を設けた参加型授業形式で進めた。なお、この授業は受講する生徒達と授業者は初対面であることから、授業者からの質問に対して不安を感じさせることや、総合的な学習の時間の自ら考え主体的に取り組む態度を育てる目標からも、無言でやり過ごすことの無いよう、授業の初めに質問の性質や答えに対する説明と2つのルールを設けた。はじめに、質問の性質についての説明では、この授業で尋ねる質問は、○×問題のような明確な答えが一つしかないような問いではないこと。したがって、求める答えは、あなたが感じたこと、思ったこと、これまでの経験を通して知っていることであり、あなたの中に存在する答えを躊躇なく発言して欲しいと伝えた。次に2つのルールとして、説明を加えながら「無言にならない」「音を出して反応する」ことを求めた。この「無言にならない」「音を出して反応する」ルールは、最初に「今後社会で働く際、声をかけられて無言で対応したり、無反応であったりしても問題ないか」と問いか

け、生徒から「問題ある」との答えを引き出した上で「社会人になったその日からいきなり反応できる人にはなれないので、学校にいるうちから日々練習していこう」と呼びかけ、ルールとすることに納得してもらった上で設定した。とはいえ、いきなりの質問に対して答えに窮する場合も想定し、「質問されてすぐに答えられない場合は、『アー』でも『ウー』でも良いので、口から音を出しながら時間を稼いだり、『もう一度質問を言ってください』や『少し待ってください』など述べたりしながら、『私はその質問を聞きました。今、考えているので少し待ってください』という気持ちを口から音を出して意思表示をしてもらえれば、いくらでもヒントを出したり、さまざまな対応をしたりします。」と、答えやすい雰囲気づくりを行った。

①気づく

学習指導要領の総合的な学習の時間の目標における「自ら課題を見つけ」ることや、基礎的・汎用的能力の課題対応能力が求める「様々な課題を発見」するには、課題に「気づく」力が求められる。そこで、本研究が考察する授業では、事前職業調べを用いた「気づく」力の指導を行った。

授業事前学習として職業調べの課題を課した。各クラスに職業の種類を315項目記入できる欄を設けた用紙を配布し、クラス単位で職種をリストアップする課題に取り組んでもらい、その成果の回収を行った。その結果、10クラス全体の平均は164.9種類、最高は315種類、最低は114種類の職業がリストアップされてきた。各クラスで共通していた職種は、教師、家庭教師、看護師、警察官、銀行員等であり、共通しなかった職種には特殊メイクアーティスト（原文ママ）や潜水士、バイオ技術者等があった。この結果を用い、最初に生徒達に対して「なぜ共通する職種が存在するのか」を問い、実際に接する機会がある、身近に働いている姿を見ることができ人の職種は思い浮かべやすい傾向にあることを認識してもらった。次に、最高数（315種類）の職業を調べたクラスの結果を用い、315種類の中に身近に接する機会があるだろうと予測できる職種をリストアップした結果、40種類あった。次に、身近に接する機会があるだろうと予測できる職種は、あまり馴染みの無い職業も含めた315種類のうち12.7%の割合しかないのは何故かと問い、高校生と接する機会がある職業はほんの一部にしか過ぎないこと、言い換えれば、高校生と接する機会が少ない仕事（目にすることが少ない仕事）の方が世の中に多く存在していること、社会は広いことを気づかせた。

②視点を広げ調べる

学習指導要領の総合的な学習の時間の目標における「探究活動」や、基礎的・汎用的能力の課題対応能力が求める「様々な課題を発見・分析」やキャリアプランニング能力が求める「様々な情報を適切に取捨選択・活用」するには、様々な課題や様々な情報を見つけるために「広い視点を持つ」ことが求められる。加えて、「探究活動」を行うためにも「学び方やものの考え方を身に付け」る「調べる」力が必要である。そこで、本研究が考察する授業では、①での気づきを用い、視点を広げ調べる指導を行った。

①での気づきを用い、さらに職種に対する視野を広げるために、社会とのつながりを意識し易い題材として、高校生にとって身近であり社会ともつながっているコンビニエンス弁当（以下、コンビニ弁当とする）を用いて、店頭にあるコンビニ弁当には高校生と接することが少ないどのような仕事をしている人と関わりがあるのかを、工場から出荷までの様子を紹介しながら考えさせた。そこから、店頭で販売する人以外にも、お弁当の生産に直接関わる仕事、原料や材料に関わる仕事、お弁当の案や栄養価も含めた企画に関わる仕事、生産や販売の数や仕入れを管理する仕事、それぞれのモノを運ぶ仕事など、コンビニ弁当には、見えないけれどあらゆる所で多様な仕事をする人が関わっており、想像を広げることで職種の幅も数も増加することを認識させた。これにより、気づきを発展させるこ

とで、調べる導入である、視点の広がり、視野を拡大する力につなげた。

続いて、『職種』どうやって調べる？」と、4つの方法（1）誰かに聞く、（2）本を探す、（3）インターネットで検索する、（4）もてる限りの記憶をたどるを提示し、それぞれのメリットと注意点に加え、例を用いて考えさせながら「真実を見つけるための『方法』を手に入れよう」と題し、共通性を見つけ○×の視点から気づく、想像力を働かせ視点（つながり）を広げる、もう一步踏み込み360度の視野（歴史・文化・社会背景などにまで）を持ち調べる範囲を広げること。「一方向からみるだけでは真実はみつからない」と題し、違う視点からみる、「なぜ？」の意識を常に持つことを通して、「学び方やものの考え方を身に付け」る調べ方を指導した。

③主体的の大切さ

学習指導要領の総合的学習の時間の目標には「自ら」や「主体的」と、基礎的・汎用的能力の自己理解・自己管理能力やキャリアプランニング能力にも「自ら」と、人間関係形成・社会形成能力には「積極的に」と、学校教育においても社会においても「主体的」に行動することが求められている。そこで、本研究が考察する授業では、①や②の学びが将来に渡って重要であることに加え、自ら「主体的」に行動することの大切さの意識付け、課題対応能力で求められる計画・実行する考え方の指導を通した、自己理解・自己管理能力が求める「今後の成長のために進んで学ぼうとする力」の育成を図った。

最後に、『学校』を卒業しても『学ぶこと』はいつまでも続く」と題し、気づき、視野を広げ、もう一步踏み込み調べる真実を見つけるための方法は、将来を生き抜くために必要な力であることを伝えた。その理由として、「これから人生をおくっていく上で、仕事、家庭、学習、趣味と様々な学びを必要とする場面があるが、その時『学校』のように『先生』はいない。自分自身が自分自身の『先生』になる必要がある」と、自ら解決法を模索していかなければならない環境下におかれること。そこで生き抜くためには、調べる力や真実を見極める力は必要であり、加えて、計画・実行する力が必要となることを伝えた。また、こうした調べる力や真実を見極める力と計画・実行する力は、生きる力であるだけでなく、社会人基礎力として未来に必要な力でもあり、この力は日頃の学習活動やクラブ活動をはじめとする日常の学校生活の中で培うことができることも伝えた。また、その方法として「 $i + 1$ 」の法則と逆算思考を取り上げた。「 $i + 1$ 」の法則では、計画を立てる際、一つ一つのステップを大きくするのではなく、少し背伸びをするくらいのステップを心掛けることを説明し、理解するために全員起立させ、目一杯背伸びした状態と少し背伸びするくらいの目安として1 cmヒールの靴を履いたイメージで少しだけ踵をあげて立った状態とを体感で比較させた。また、ゴールが現在の自分の位置と遠いと感じた時は、逆算思考で足元まで小さなステップで降りてくる計画の立て方を指導した。

5. 結果の考察

本研究が対象とした授業の指導法を検証するために、授業後、授業を振り返った質問紙調査を行った。調査内容は、授業に対する感想の自由記述に加え、②視点を広げ調べるで扱った共通性、想像力、もう一步踏み込む、360度の視野、違う視点からみる、③主体的の大切さで扱った「 $i + 1$ 」の法則について授業受講前の行動と受講後の気持ちを4件法でたずね、単純集計結果およびクロス集計し χ^2 検定を行った結果を表1～6に示した。

5.1 気づく指導の考察

事前職業調べを用いた「気づく」力の指導に対し、自由記述（原文ママ、下線筆者）では次のような回答があった。「仕事のことが良く分かった。自分の知らない職業がたくさんあることに気づ

いた」「色々な仕事があるんだとあらためて思った」と職種の多さに気づき、さらに「仕事についての多さに対して驚きをもてた。知らない事ではなくて気づかなかったことだと思った」と気づくことで見えてくることを実感し、「社会は知らないところで動いているんだと思った」と授業の目的が伝わっていることがわかる。また、「自分は、なりたい職業とか将来の夢とかまだ決めていないけど、それは、自分が知っている職業はこの世界の中でほんの少しにすぎないからだと思い、いろいろな職業を知りたくなりました」「自分が知っている職業以外にも様々な仕事があるので、どんな職業ならやりたいか調べてみようと思います」と知らないことに気づくことが学習意欲につながっていることから、事前職業調べを用いた「気づく」力の指導は一定の効果があるといえよう。

5.2 視点を広げ調べる指導の考察

広がりやの気づきを発展させることで、調べる導入であるコンビニ弁当を用いた、視点の広がり、視野の拡大につなげる指導に対し、自由記述（原文ママ、下線筆者）では「何かを作っている人のうしろにも人がいて・・・という深い考え方をしたことがなかったのが新鮮でした」と考え方そのものに新鮮さを感じる記述や、「身近なもの一つでも多くの人々が関わっているというのは果てしないものだと思った」と視野が拡大しているのがわかる記述、さらには「コンビニのお弁当で容器を作っている人やその人の服とか作っている人とか今までに考えたことないくらい深く考えました」と視野を広げて考えを拡大深化していることから、視点の広がり、視野の拡大深化につなげるコンビニ弁当を用いた導入の指導は一定の効果があるといえよう。

視点を広げ「学び方やものの考え方を身に付け」る調べ方を指導については、共通性、想像力、もう一步踏み込む、360度の視野、違う視点の5つに分け、自由記述と単純集計、クロス集計し χ^2 検定を行った結果からも考察を行う。

(i) 共通性

表1 共通性をみつけることをしていたと共通性を見つけようと思うのクロス集計

		[事後]これから、共通性を見つけようと思う			
		全く当てはまらない	あまり当てはまらない	少し当てはまる	当てはまる
[事前]	全く当てはまらない	4 (1.2%)	12 (3.7%)	11 (3.4%)	3 (0.9%)
今まで、共通性をみつけることをしていた	あまり当てはまらない	2 (0.6%)	35 (10.8%)	84 (26.0%)	21 (6.5%)
	少し当てはまる	0	20 (6.2%)	71 (22.0%)	32 (9.9%)
	当てはまる	0	1 (0.3%)	9 (2.8%)	18 (5.6%)

($\chi^2=68.475^a$, df=9, $p<0.001$)

表1に示すように、今まで共通性をみつけることをしていなかった生徒の割合は53.1% (172名)と半数以上が該当していた。そのうち授業を受けることで今後前向きに取り組もうと感じた生徒の割合は69.2% (119名)であった。また、授業を受けることで今後共通性を見つけようと感じた生徒 (77.1%)は、事前に共通性を見つけていた生徒 (40.3%)も見つけていなかった生徒 (36.8%)も同様に前向きに取り組もうと感じていることから、事前に共通性を見つけていたかの有無に関係なく、授業によって前向きに取り組む姿勢の育成に一定の効果があることが期待できる。

(ii) 想像力

表2 想像力を働かせていたと想像力を働かせようと思うのクロス集計

		[事後]想像力を働かせようと思う			
		全く当てはまらない	あまり当てはまらない	少し当てはまる	当てはまる
[事前]	全く当てはまらない	5 (1.6%)	4 (1.2%)	4 (1.2%)	2 (0.6%)
想像力を働かせていた	あまり当てはまらない	0	25 (7.8%)	49 (15.3%)	9 (2.8%)
	少し当てはまる	0	6 (1.9%)	127 (39.6%)	46 (14.3%)
	当てはまる	0	2 (0.6%)	9 (2.8%)	33 (10.3%)

($\chi^2=206.423^a$, df=12, $p<0.001$)

表2に示すように、今まで想像力を働かせていた生徒の割合は69.5%（223名）と授業前から多くの生徒が実践していた。その一方で30.5%（98名）の生徒は未取り組みであったが、そのうち65.3%（64名）の生徒が授業を受けることで今後前向きに取り組もうと感じていた。その結果、授業を受けることで今後想像力を働かせようと感じた生徒の割合が86.9%と約9割を占めたことから、授業によって前向きに取り組もうと感じた可能性が高いことが示唆された。

(iii) もう一步踏み込む

表3 もう一步踏み込んでいたともう一步踏み込もうと思うのクロス集計

		[事後] もう一步踏み込もうと思う			
		全く当てはまらない	あまり当てはまらない	少し当てはまる	当てはまる
[事前] もう一步踏み込んでいた	全く当てはまらない	4 (1.2%)	8 (2.5%)	14 (4.3%)	6 (1.9%)
	あまり当てはまらない	1 (0.3%)	41 (12.7%)	93 (28.9%)	43 (13.4%)
	少し当てはまる	0	8 (2.5%)	57 (17.7%)	22 (6.8%)
	当てはまる	1 (0.3%)	2 (0.6%)	2 (0.6%)	20 (6.2%)

($\chi^2 = 71.546a$, $df=12$, $p < 0.001$)

表3に示すように、今までもう一步踏み込むことをしていなかった生徒の割合は65.2%（210名）と半数以上が該当していた。そのうち授業を受けることで今後前向きに取り組もうと感じた生徒の割合は74.2%（156名）であった。また、授業を受けることで今後もう一步踏み込もうと感じた生徒の割合は79.8%（257名）と、事前にもう一步踏み出していた生徒の割合（34.8%）と比較しても、授業後に多くの学生が前向きに取り組もうと感じていることから、授業によってもう一步踏み込もうとする気持ちの育成に一定の効果があることが示唆された。

(iv) 360度の視野

表4 [事後] 360度の視野を持つと思うの単純集計

[事後] 360度の視野を持つと思う			
全く当てはまらない	あまり当てはまらない	少し当てはまる	当てはまる
8 (2.5%)	38 (11.8%)	172 (53.6%)	103 (32.1%)

表4に示すように、授業後360度の視野を持つと思うと感じた生徒の割合は85.7%（275名）と多くの生徒が前向きに手法を取り入れようと感じていることが示唆された。授業によって視野を拡大する姿勢の育成に一定の効果があることが期待できる。

(v) 違う視点からみる

表5 違う視点からみることを意識していたと違う視点からみることを意識しようと思うのクロス集計

		[事後] 違う視点からみることを意識しようと思う			
		全く当てはまらない	あまり当てはまらない	少し当てはまる	当てはまる
[事前] 違う視点からみることを意識していた	全く当てはまらない	6 (1.9%)	6 (1.9%)	5 (1.6%)	3 (0.9%)
	あまり当てはまらない	2 (0.6%)	26 (8.1%)	85 (26.4%)	28 (8.7%)
	少し当てはまる	0	15 (4.7%)	82 (25.5%)	26 (8.1%)
	当てはまる	1 (0.3%)	0	10 (3.1%)	26 (8.1%)

($\chi^2 = 112.679a$, $df=12$, $p < 0.001$)

表5に示すように、今まで違う視点からみることを意識していなかった生徒の割合は50.1%（161名）と、学年の半分が意識している生徒と意識していなかった生徒とに分かれた。しかしながら、授業を受けることで今後前向きに取り組もうと感じた生徒は82.4%（265名）と、8割を超える生徒が前向きに取り組もうと感じていることから、授業によって違う視点からみることを前向きに取り組もうと感じた可能性が高いことが示唆された。

自由記述では、「自分は、今まで、いろんなことを視野を広げてみることができていなかったと思った」とこれまでの自分の視野の範囲に気づき、「自分は世界まで視野をひろげることはあまりしてなかった。これを聞くと、今まで身のまわりだけだった視野も世界まで広げるとより多くのことがわかるんだと思った」と視野を広げることで知る範囲が広がることを認識し、「視野を広く持つこと

はとても大切だということは分かっていたけれど、より実感させられた」と体感による理解にもつながっていることがわかる。さらに調べ方に対し「調べる方法は1つではなくてたくさんあると思った」「自分はあまり、多角的思考で物を見る方でないので、参考にできればと思った」「社会の背景などを使って本質を見るのは大切だと思った。とてもわかりやすく視野の広げ方を教えていただけてありがとうございます！」と調べ方が数種類のあることを肯定的に捉えるに留まらず、「一つのことを多くの方向から見るということは、とてもいろんなことを考えられて楽しい」と考えることに楽しさを感じている記述や、「仕事は調べたらまだまだあると思うので視野を広げて色々調べてみようと思いました!」「もっと、視野を広げて、社会のことについて学んでいきたい」と学習意欲につながっていることから、視点を広げ「学び方やものの考え方を身に付け」る調べ方の指導は一定の効果があるといえよう。

5.3 主体的の大切さの考察

主体性の大切さの考察は、「i + 1」の法則の授業受講前の行動と受講後の気持ちをクロス集計し χ^2 検定を行った結果と自由記述から考察を行う。

(vi) 「i + 1」の法則

表6 「i + 1」の法則で適切な計画をたてていたと「i + 1」の法則を使おうと思うのクロス集計

		【事後】「i + 1」の法則を使おうと思う			
		全く当てはまらない	あまり当てはまらない	少し当てはまる	当てはまる
【事前】 「i + 1」の法則 で適切な計画をた てていた	全く当てはまらない	22 (6.9%)	16 (5.0%)	21 (6.6%)	11 (3.4%)
	あまり当てはまらない	1 (0.3%)	66 (20.6%)	60 (18.8%)	25 (7.8%)
	少し当てはまる	0	11 (3.4%)	52 (16.3%)	15 (4.7%)
	当てはまる	1 (0.3%)	0	5 (1.6%)	14 (4.4%)

($\chi^2 = 136.076a$, $df = 12$, $p < 0.001$)

表6に示すように、今まで「i + 1」の法則で適切な計画をたてることをしていなかった生徒の割合は69.4% (222名) と約7割の生徒が該当していた。そのうち授業を受けることで今後前向きに取り組もうと感じた生徒の割合は52.7% (117名) と半数に留まった。一方、適切な計画をたてていた生徒の割合は30.7% (98名) と少なかったが、そのうち授業を受けることで今後前向きに取り組もうと感じた生徒の割合は87.7% (86名) と大半の生徒が肯定的に感じていることが示唆された。このことから、「i + 1」の法則で適切な計画をたてることについては、事前に取り組んでいた生徒と、取り組んでいなかった生徒の半数には、授業によって前向きに取り組む姿勢の育成に一定の効果があることが期待できる。

また、自由記述(原文ママ、下線筆者)では、「これからi + 1の考え方を持とうと思った。自分のなりたい職業につけるよう頑張ろうと思った」「自分ですこし背伸びを毎回しないといけないなと思った」「自分自身のゴールを定めて後ろから段階を踏んでいきたいと思いました」「物事を1つの方向から見るとはなくていろんな方向から見て、考え方を増やしていこうと思った」と、「i + 1」の法則や逆算思考など多様な考え方を取り入れようとする記述。「私は授業中でも黒板とかの文字をうつすだけで考えることをしていなかったから今日の元根先生の話であらためようと思った」「すぐにネットにたよることはダメなんだろうと思った。自分でできるだけ考えていくことが大事なんだろうと思った」「今どうすべきかとか、もっと自分が考えなければいけないと思った」「わからなくても考え続けようと思った」と考えることに意欲を持つ記述、「今からでも目標を決め考えているだけでなく行動に移そうと思いました」「自分の知識だけでは、まだまだ知らないことが多いので、色んなことを学び、体験して視野を広げようと思いました」「自分の記憶や知識を深めるためには、他人に頼るだけでなく自分から行動しなくてはいけないと思った」と自ら行動し学ぶ意欲がある記述、「勉強でも、分かん。知らん。っていう前に『どうして?』『何が?』とか疑問に思うことを調べたり考

えようと思いました。仕事も、自分が興味を持ったことから掘り下げて調べたりしてみようと思いました」と日常生活でも意識して行動しようとする記述がみられた。これらのことから、主体的の大切さで「今後の成長のために進んで学ぼうとする力」の育成を目指した本指導法は一定の効果があるといえよう。

6. おわりに

本研究ではさまざまな物事に気づく力、前向きに取り組む心、自ら探求するために考え、調べ方を知り、主体的に行動に発展させていくことを目的とした高等学校での総合的学習の時間におけるキャリア教育の授業の、「ある中」からではなく外に一步踏み出し、向上心を持ち、自ら学ぶ働きかけをする指導法について考察を行った。自由記述やクロス集計し χ^2 検定を行った結果から、ある中から進路を決めようとする傾向や内へ内へ狭まっていく選択、将来を考えることの楽しさのなさ、向上心の無さや学習意欲の乏しさといった進路相談時や先行研究で案じられた問題に対し、この指導法には一定の効果があると期待できる。また、この指導を行う際、全生徒が参加できるよう工夫を凝らしたが、生徒からは「みんなで授業を参加して、全然眠たくならなかった」「久しぶりに一体感のある講演に参加できて良かった」「一方的にしゃべるんじゃなく参加型?の講義で考えることが多く、よかった」との評価を得ると共に、全生徒が参加できる授業であったことで、考えることに対し前向きな姿勢を育成できたのではないだろうか。しかしながら、一部の学生にはあてはまらないことが観察できたので、アプローチの内容を豊富化し、さらに将来を考えることが楽しいと思え、向上心を持って一歩外に踏み出し学ぶ意欲の育成につながる指導法を検討していきたい。

主要参考文献

- 秋田県総合教育センターキャリア教育プロジェクト (2011)「H23 船川第一小学校支援 (キャリア) 012」
(<http://www.akita-c.ed.jp/~ckys/career/career-kouza2.pdf>)
- 木多功彦 (2010)「高等学校普通科におけるキャリア教育に関する実践研究」岡山大学教育学部附属教育実践総合センター編『岡山大学教育実践総合センター紀要』, 10, pp. 105-116.
- 一般社団法人全国高等学校PTA連合会・株式会社リクルートマーケティングパートナーズ 合同調査 (2009),「第4回 高校生と保護者の進路に関する意識調査2009」、(2015) 第7回「高校生と保護者の進路に関する意識調査2015」
- 中央教育審議会答申 (1999年12月)「初等中等教育と高等教育との接続改善について」
- 中央教育審議会 (2008)「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について (答申)」
- 中央教育審議会 (2009)「資料7.基礎的・汎用的能力の明確化と、その育成について」キャリア教育・職業教育特別部会 (第7回) 配付資料, 平成21年5月12日. (http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo10/shiryo/1267523.htm)
- 中央教育審議会 (2011)「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について (答申)」
- 藤上真弓 (2014)「総合的な学習の時間におけるキャリア教育に必要な学びの研究:「生きる力」を身に付けていくための指導の工夫」山口大学教育学部附属教育実践総合センター『教育実践総合センター研究紀要』(38), pp. 131-141.
- 藤田晃之「新学習指導要領が求める キャリア教育の推進とその課題」, 実教出版, pp. 4-6 (www.jikkyo.co.jp/contents/download/801637390)
- 巻野恭明 (2006)「すべての子どもたちの未来を拓く生き方探究教育 (キャリア教育) とはⅡ—小学校6年社会科, 中学校3年社会科の実践を通して—」総合教育センター研究課『研究紀要』, pp.1-30.
- 松本浩司 (2012)「高等学校におけるキャリア教育のさらなる展開に向けて —教授・学習開発論の視点から教科教育での取り組みを中心に—」名古屋学院大学総合研究所『名古屋学院大学論集社会科学篇』49(1), 125-143.
- 三河光博 (2009) 高等学校における系統的なキャリア教育を実践するための指導プランの作成に関する研究

- 「総合的な学習の時間と特別活動を中心として」平成20年度（第52回）岩手県教育研究発表会発表資料，pp.1-22.
- 元根朋美・奥村玲香（2011）「日本の高等教育における「キャリア教育」の変遷と取り組み」韓国日本近代学会『日本近代学研究』第33輯，pp.161-176.
- 文部科学省（2008）「学習指導要領」
- 文部科学省（2008）「教育振興基本計画」

(Endnotes)

- 1 2009年の調査では「自分がどうなってしまうのか不安になる」の回答がした49.3%と、約半数の高校生が「楽しい」(26%)よりも「不安」を感じている結果がある。p. 47, 146.
- 2 教育基本法 第二章 教育の実施に関する基本（義務教育）第五条 2 義務教育として行われる普通教育は、各個人の有する能力を伸ばしつつ社会において自立的に生きる基礎を培い、また、国家及び社会の形成者として必要とされる基本的な資質を養うことを目的として行われるものとする。（下線は筆者による）
- 3 （2008年7月閣議決定）人材育成に関する社会の要請に応えるための主な取り組みに、小学校段階からのキャリア教育、特に中学校を中心とした職場体験活動や普通科高等学校での取組を推進、専門高校等における職業教育や、大学・短期大学・高等専門学校・専修学校等における専門的職業人や実践的・創造的技術者の養成を推進、産業界・地域社会との連携による人材育成を強化があげられる。